【資料紹介】

手錢記念館蔵『年中心おぼへ』翻刻と紹介

野本瑠美
（島根大学法文学部）

摘　要

手錢家七代当主の妻・さの子の手控え『年中心おぼへ』を翻刻、紹介する。

キーワード：手錢さの子、富永芳久、手錢記念館、『丁巳出雲国五十歌撰』

解説

島根県出雲市大社町の手錢記念館が所蔵する『年中心おぼへ』は、手錢家七代有鞆の妻・さの子（一八一三～一八六二年）による、消息文の下書き、和歌、跋文草稿等を記した手控えである。

手錢さの子（注1）は今市（現在の出雲市今市町）の直良家の出身で、文政九年（一八二六）、手錢家七代当主の手錢有鞆に嫁いだ。中臣正蔭や田中清年、富永芳久らに和歌や俳諧、狂歌を学び、安政三年（一八五六）の『丙申出雲国三十六歌仙』等の作者となり、翌年の『丁巳出雲国五十歌撰』で跋文を執筆している。さの子の和歌や俳諧等の著作、さの子手沢本は手錢家に数多く残され、さの子の文芸活動を知る重要な手がかりとなっている。

『年中心おぼへ』に記された内容は様々で、さの子が執筆した『丁巳出雲国五十歌撰』跋文と思しい文章の草稿や、それに関わる富永芳久への消息下書き、さの子が詠んだ和歌のほか、別書から書き写した文章等も見られる。次頁の表で『年中心おぼへ』所収の和歌、文章等の概要を示す。

通し番号	丁	冒頭部分	概要
①	1丁オ	は、かりなから文して	書簡手本の写しか
②	2丁オ	わさと文して	書簡手本の写しか
③	2丁ウ	朝さむ夜寒もいやましとも	富永芳久宛消息下書き
④	3丁オ	撰　撰　撰	漢字の試し書きか
⑤	3丁ウ	朝ゆふさむけもいやましに	富永芳久宛消息下書き
⑥	4丁ウ	楯歌／哥のすかたこのめるは	『丁巳出雲国五十歌撰』跋文草稿か
⑦	5丁オ	天の下たくひなき出雲の大宮	『花のしづ枝』跋文写し
⑧	5丁ウ	恋／恋わひてとしふるまゝに	さの子和歌
⑨	5丁ウ	八雲たついつもの事は	『丁巳出雲国五十歌撰』跋文草稿
⑩	6丁オ	うれしうおもい給ふるに	『丁巳出雲国五十歌撰』跋文草稿
⑪	6丁オ	八雲たつ出雲八重垣そのかきねに	『丁巳出雲国五十歌撰』跋文草稿
⑫	6丁ウ	一子みちひらのこん礼をよろこひて	さの子和歌

以下、右の各文についてその内容を掲げる。なお、この解説で引用する本文は、読みやすさを考慮して翻刻本文に濁点を付し、踊り字をひらき、改行位置を改める等の処理を施している。

①②は候文体による書簡文である。二通とも、差出人・宛先が「たれより／たれ様」となっていることから、実際にやりとりされた書簡の下書や写し等ではなく、往来物・女筆手本等の例文を写したものと思われる。

③⑤は、さの子から富永芳久宛に書かれた書簡（消息）の下書きと思しい。①②の文体とは異なり、雅文体による消息文である。③にはミセケチや墨線による抹消、同筆による訂正や補入等が多い。一方、⑤にはそのような痕跡は見られず、③の修正が反映され、日付や差出人、宛先が加えられていることから、完成稿あるいは完成稿に近い形態の手控えであることがうかがえる。字の大きさも③より大ぶりに書かれている。

文中に見られる「三十六歌のしりへ書せよ」（③）、「三十六歌仙のしりへ書をおのれにせよ」（⑤）という芳久からの依頼は、安政四年（一五八七）の『丁巳出雲国五十歌撰』の跋文執筆の依頼と推定されている（注2）。刊行された『丁巳出雲国五十歌撰』の跋文には安政四年正月とあることから、⑤の日付「きく月けふ」は、前年の安政三年九月であろうか。さの子の消息には「きの国へ行せ給ふもちかぢかと承り侍りぬ」（③）、「きいの国行人もちかぢかとなん承り侍りぬ」（⑤）と芳久の紀州訪問が記されているが、大坂の出版書肆河内屋茂兵衛から富永芳久に送られた書簡から、芳久は安政三年九月から紀州に滞在していたことが指摘されている（注3）。なお『丁巳出雲国五十歌撰』の芳久自序に「安政四年正月元日木国のやどりにしるす」（注4）とあることから、芳久は少なくとも翌年正月まで紀州に滞在していたのであろう。

さて、⑤への返信と思しき消息が、さの子が様々な人の消息を書き写した『かたがたのせうそこうつし』に収められている。両消息の後半部分を見てみよう。

『年中心おぼへ』（⑤）

三十六歌仙のしりへ書をおのれにせよとのたまひつるよし承り、いといとかたじけなくうれしく侍れど、あまりにおこなるわざに

し侍れば、はづかしく幾たびもじし侍りしを、清とし君、清かね君こそめいぼくのことぞとせちにすすめ給へば、いなみがたくて、いとつたなきことなんいひ出侍りぬ。君よきに見直したまはんことをねがひ奉るになん。あなかしこ

きく月けふ　　さの子

楯舎大人御まへに

『かたがたのせうそこうつし』（注5）

はた、ここに三十六歌仙のしりへがきおこせ給ひ、いとまめやかにかい出給ひにけりとあはれにおむがしうなん見たたへ侍る。げに何某君たちののたまへ侍やうに、此国のめいぼくに南、いかでいかでとくとくかいつけ給へ。やがてゑり下書にもつかはすべうなん。あなかしこ。

九月廿五日

佐野子君御もとに　　よしひさ

跋文執筆を依頼されたさの子は嬉しくも恐縮するが、大社社家の田中清年、清かね（伝未詳）の強いすすめにより執筆、芳久の添削を求めている。これに対し、芳久は「あはれにおむがしう」（心うたれて面白く）拝見したと返答している。芳久の「何某君たち」はさの子の消息に見られる清年らを指すのであろう。翌年刊行される『丁巳出雲国五十歌撰』について、この時点では両者とも「三十六歌仙」と呼んでおり、当初は『丙申出雲国三十六歌仙』と同じ三十六歌仙形式を想定していたこともうかがえる。

④は漢字「撰」や「虫」が繰り返し書きつけられている。試し書きの類いか。

⑥の「楯歌」と題された文章は「楯舎うしのせちにのたまひつるもいなみがたくて、此のしりへ書をなんわななきつつかきいづる」とあることから、③⑤に見える「しりへ書」すなわち『丁巳出雲国五十歌撰』のための跋文と推測される。ただし、刊行された跋文と比較すると内容は大幅に異なっている（後述）。

⑦は『花のしづ枝』の跋文（尾張藩士市岡和雄執筆）を書き写したもの。『花のしづ枝』は千家尊澄が編纂したと推定され、見返し題副題に「出雲国杵築現存五十歌仙」とある通り、当時現存する杵築の歌人五十人の歌を一首ずつ記したもので、さの子の歌も採られている。赤塚澄景が記した序文には「安政四年の春」とあることから、安政四年（一五八七）の刊行と推測される。ただし、同じ安政四年の『佐波のあら玉』（鈴木高鞆編）の跋文によれば、周防国の佐伯鞆彦・渡邊敬澄の両名が「過ぎしふみ月の頃」（安政三年七月か）出雲参詣の折に出雲で編纂された「三十六歌選又五十歌選といふうた巻」を千家尊澄から贈られたという。中澤伸弘氏（注6）が指摘するように、この五十歌選が『花のしづ枝』とすると、原本の完成は安政三年七月以前に遡る可能性もある。

⑧はさの子の詠歌。先の『花のしづ枝』に採られた一首である。

⑨は「しりへ書をなんわななきつつかきいづる」とあることから、『丁巳出雲国五十歌撰』跋文の草稿と思われるが、⑥とは異なる内容を持つ。全体にミセケチや墨線による抹消、同筆による訂正が施されている。⑩は、⑨の後半にあたる部分を書き改めた文章、続く⑪の冒頭には合点が付され、⑨⑩による修正を反映した文章となっている。なお⑪と刊行された跋文もまた内容を異にする。以下、『年中心おぼ

へ』⑥⑪と刊行された際の跋文（完成稿）とを比較してみる。

『年中心おぼへ』⑥

歌のすがたこのめるはおのがじしにて、つよからぬはをうなのうたなればなるべし、とぞ聞へける。そをだに好める男もいでくる世にしあれば、大夫ぶりをすなるたをやめもあらではなん、と楯舎うしのせちにのたまひつるもいなみがたくて、此しりへ書をなんわななきつつかきいづる。神代にありけんおもかつわざなりと、人わらはれもやさしきものから　手錢さの子

『年中心おぼへ』⑪　※訂正本文のみ記す

八雲たつ出雲八重垣そのかきねにすむ人々の哥ども、日にまし月にくらすさかふるを、いとかたじけなく嬉しうなんおもひ侍るに、楯舎大人は殊にめでおほして、としどし歌どもあつめえり出給ふに、こたび此しりへがきせよとせちにの給ふもいなみがたく、つきなき事もかへり見ず、わななきつつかいつけ侍る

『丁巳出雲国五十歌撰』跋文（完成稿）

八雲たつ出雲八重垣神代も今もへだてなく、ことの葉の道のみさかりなるもたふとき国がらになん有ける、そこをしも楯舎大人の殊におむかしみ嬉しみまして、としごとに国内のうたどもをあつめてえり出給ふに、こたみ此ふみのしりへにひとことをのたまふもいなみがたく、かつはおなじこゝろのうれしさにたへず、つゝましさをもわすれはてゝなん

安政四年正月　手錢さの子

⑥が芳久の言葉を引用しつつ跋文執筆の経緯を語るのに対し、⑪や完成稿では冒頭を「八雲立つ出雲八重垣」という序詞から始め、出雲国での和歌隆盛を記す共通点が見られる。また「としどし歌どもあつめえり出給ふ」（⑪）や「ことしごとに国内のうたどもをあつめてえり出給ふ」（完成稿）という毎年の歌集編纂という芳久の試み（注7）に言及する点も共通し、⑥よりも⑪が後に書かれたものと推測される。さの子が跋文を何度も書き直し推敲していた様子がうかがえよう。なお、完成稿はさの子の自撰歌文集『朝宵草』にも収録されている。

⑫はさの子の詠歌。「一子みちひら」とは八代当主となる手錢満平（安秀）を指す。満平の婚礼は安政四年（一八五七）十月に執り行われた（注8）。

以上、文章が記されているのは6丁までで、残りの16丁は白紙のまま残されている。執筆年時が推定されるものはおおよそ安政三年～四年頃のものであった。

注

（1）手錢さの子の事蹟については、下記の論考を参照した。佐々木杏里「手錢さの子と杵築文学」（『出雲文化圏と東アジア』勉誠出版、二〇一〇年）、田中則雄「手錢家蔵書と出雲の文芸活動」（『調査研究報告』三三、国文学研究資料館、二〇一二年）、芦田耕一『江戸時代の出雲歌壇』（島根大学法文学山陰研究センター、二〇一二年）、佐々木杏里「手錢さの子と女性の文芸活動」（『出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動』今井出版、二〇一八年）等。

（2）注（1）田中論考。

（3）中澤伸弘「富永芳久と出板活動」（『徳川時代後期出雲歌壇と國學』錦正

社、二〇〇七年）。同「出雲歌壇をめぐる歌書と人物」（同書）でも、安政二、三年頃の芳久の紀州往来が指摘されている。

（4）『丁巳出雲国五十歌撰』の本文は芦田耕一編著『出雲国の四歌集』（二〇〇七年）の翻刻から引用した。

（5）本文引用は、拙稿「翻刻『かたがたのそうせこうつし』」（『山陰研究』一一、二〇一八年）の翻刻を用いたが、読みやすさを考慮し翻刻本文に濁点を付している。引用箇所は、前掲翻刻における通し番号⑫にあたる消息である。

（6）前掲（3）中澤「出雲歌壇をめぐる歌書と人物」。

（7）『丙辰出雲国三十六歌仙』序文で富永芳久は「いとはかなきすさびなれども年毎にかゝるさまにものせんとておもひたちぬれば」と記しており、毎年の歌集編纂を企画していたことが知られる。引用は前掲（4）芦田編著。

（8）手錢家所蔵『安政四年丁巳十月　婚礼一途』（『平成27年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書』所収「「萬日記」と手錢家の婚礼」公益財団法人手錢記念館、二〇一六年）に拠る。

書誌

手錢記念館所蔵／写／折紙列帖装一帖／函架番号　五八三／一三・八×一九・八糎／表紙は本文共紙、表紙中央に直書で「年中心おほへ」、裏表紙に「手錢さの子」と記す／全二二丁、墨付六丁、後遊紙一六丁／一面の行数は不定

凡例

一、翻刻の字体は可能な限り原本どおりとした。ただし文字の大小・字配りは必ずしも忠実ではない。

一、便宜上、各文章の冒頭に通し番号を丸数字で付した。

一、改行位置は可能な限り原本の通りにした。原本の各丁片面の終わりに当たるところに　」をつけ、（　）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

一、ミセケチ記号は「ヒ」で示した。

一、墨消ちは、下の字が判読可能な場合は一重線で示し、判読不能な場合は■で示した。傍記や補入、補入記号については、可能な限り原本の体裁を残すよう翻刻した。

翻刻

①　はゝかりなから文して
申上まいらせ候折しもひやゝかに
おはしまし候處その
御かたとなた様にも御揃遊
はします〳〵御きけん
よく入らせられ候はんと
云なふめてたく存上まいらせ候
つきにわたくし事ひるふしに
くらしまし候まゝ涼なる分
御参もしやすく思召かせ候　」（1丁オ）
さしてかわる事もろ〳〵
候得共時の御謹ともはあらせ
られすにやと御うかゝひの
申存まてにおはしまし候
　めてたくかしく

卯月
けふ　　たれより
たれ様
御もとへ人々御申　」（1丁ウ）

②
わさと文して申入まいらせ候
折からとてひや〳〵しく候へ
御事様御さわりともはふらむや
謹へく申候つきに此かた
ふしにくらし候まゝ御きもし
下されましく候扨いつやら
御たのみの所やう〳〵とゝのひ
候まゝ送り恵へく申候
いまた申入らるゝ事かす〳〵
候得共何も御めもしのふしと　」（2丁オ）
申致しまゐらせ候
めてたくかしく
葉月
けふ　　たれより
たれ様
参る
になり

③
朝さむ夜寒もいやましとも侍るを
れいの
御まへには何事かおはしますらん扨は
きの国へ行せ給ふもちか〳〵と承りぬ侍りぬ十
長き夜の旅の寐さめさそと〳〵とおもひ
やりなかりぬ越させ給はん川風山おろし
せちにいとひ給へねかし十扨三十六歌の
しりへ書をせよとのたまひつるよし聞へ給へと
いとおこかましくはつかしく
承りいと〳〵かたしけなく嬉しく侍れと　」（2丁ウ）
余りにおこかましくはつかしく幾たひも
しゝ侍りしを清とし君清かね君
こそめいほくのことそとせちにすゝめ
給へいなみかたくていとつたなきことなん
いひ出侍りぬいかにも〳〵直させ給へて
に見直し
よきなをさせ給はんことをねかひ奉るに
なん

④
撰　撰　撰　撰虫
虫　」（3丁オ）

⑤
朝ゆふさむけもいやましに
なり侍るを御まへには何事か
おはしますらんさては紀伊
きいの国行人もちか〳〵となん
承り侍りぬ三十六歌仙の
しりへ書をおのれにせよと
のたまひつるよし承りいと
〳〵かたしけなくうれしく
侍れとあまりにおこなるわさ

にし侍れははつかしく幾
たひもしゝ侍りしを清とし　」（3丁ウ）
君清かね君こそめいほくの
ことそとせちにすゝめ
給へはいなみかたくていと
つたなきことなんいひ出
侍りぬ君よきに見直し
たまはんことをねかひ奉るになん
あなかしこ
きく月
けふ　さの子
楯舎大人
御まへに　」（4丁オ）

⑥
楯歌
歌のすかたこのめるはおのかしゝ
にてつよからぬはをうなのうた
なれはなるへしとそ聞へけるそ
をたに好める男もいてくる
世にしあれは大夫ふりをすなる
たをやめもあらてはなんと楯舎
うしのせちにのたまひつるも
いなみかたくて此しりへ書を
なんわなゝきつゝかきいつる
神代にありけんおもかつわさ
なりと人わらはれもやさし
きものから手錢さの子　」（4丁ウ）
第■■■

⑦
天の下にたくひなき出雲の大宮
のにしひむかしにそひえたる鶴
亀の二山にさきいてけんこと葉の花は
いつれおとれりともなくとり〳〵に
めてたうけに世ににぬいろかなり
かしそも此集を花のしつえと名
つけたるはまつめにちかき下枝の花
を手折来てとはし文にかける
心はへなるへしされとかく遠き方にし
もあふかれてふかきかをりのみち来れ
はほつえの花とこそいはまほし
けれと尾張の殿人
いち岡
和雄いふ　」（5丁オ）

⑧
恋
恋わひてとしふるまゝに
くちなしのしたそめ衣
くちやはてまし
そのかきねに
八重垣　おのかしゝ

⑨
八雲たついつもの事はいふへくも
あらねとわたりにすむ人々のよみ出給ふ哥も
なりやまとことの葉のはにましの

月にそひさかふる年のつねに
　　めてたきに
かたしけなくうれしうおもひ給ふ
るを楯舎うしのさうれしう
おもはゝ此しりへ書せよと
まいて楯舎大人の神事をゆたね
　給のせちなる やまと心
給ふかいと〳〵うれしくて此しりへ
書をなんわなゝきつゝかきいつる 」（5丁ウ）
うれしうおもひ給ふるに楯舎うしは
殊にめておほしてとし〳〵哥にも
あつめえり出給ふに此度此しりへかき
せよとせちにの給ふもいなみかたく
つきなかき事もかへり見すわなゝき
つゝかき出る

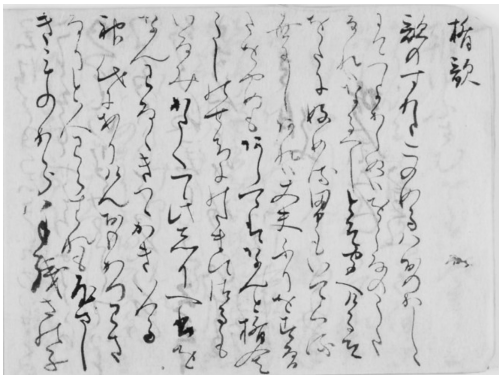
⑩

「八雲たつ出雲八重垣そのかきねにすむ
人々の哥とも日にまし月にくらすさかふる
　　侍るに
をいとかたしけなく嬉しうなんおもひ給ふるに留
■大人は殊にめておほしてとし〳〵歌とも
楯舎
あつめえり出給ふにこたひ此しりへかき
せよとせちにの給ふもいなみかたくつき
なき事もかへり見すわなゝきつゝ
いつけ侍る
かき出る 」（6丁オ）
　一子みちひらかこん礼を
　よろこひて
水そゝきおふしたてたる
たもし子のめとるほとにも
　そうれしき
なりにけるかな 」（6丁ウ）

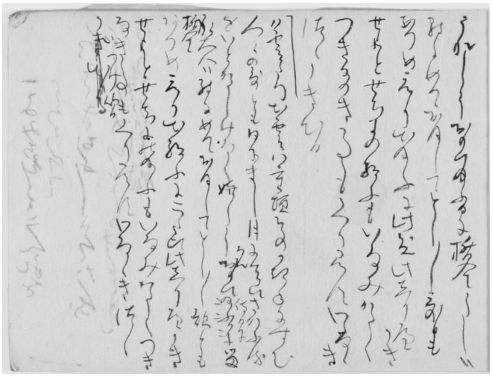
⑪

〔参考図版〕

1. 表紙



2. 4丁ウラ



3. 6丁オモテ

〔付記〕貴重なご所蔵品の調査をお許しくださった手錢家の皆様、調査にあたり様々に御教示を賜った手錢記念館学芸員佐々木杏里氏に厚く御礼申し上げたい。

なお、本稿は山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」（二〇一九～二〇二一年度、代表・田中則雄）による研究成果の一部である。

The Tezen Family Archives "Nenjyu Kokoro Oboe": Reprint and Introduction

NOMOTO Rumi
(Faculty of Law and Literature)

〔Abstract〕

The purpose of this report is to reprint and introduce "Nenjyu Kokoro Oboe", which is owned by the Tezen Museum in Taisha-cho, Izumo City, Shimane Prefecture.

The "Nenjyu Kokoro Oboe" is a handwritten manuscript of *waka* poetry and letters written by Tezen Sanoko, the wife of the seventh head of the Tezen family in the late Edo period.

Keywords:
Tezen Sanoko, Tominaga Yoshihisa, Tezen Museum, “Teimi Izumo-no-kuni Gojyu-Kasen”